シンベグィレ

Rukia Nantale
Benjamin Mitchley
Ryoko Sakakibara
japanska
nivå 5

(utan bilder)

お母さんが死んでしまって、シンベグィレは、ほんとうに本当に悲しい気持ちでした。けれども、お父さんがシンベグィレのためにできる限りのことをしてくれたので、お母さんがいなくても、少しずつですが元気になれるようになりました。ふたりは、毎朝同じ椅子に一緒に座ってその日のことをはなし、夜には一緒にご飯をつくりました。そして、片付けが終わったら、お父さんがシンベグィレの宿題を手伝うのでした。

ある日のことでした。お父さんがいつもより遅く帰ってきました。「シンベグィレ、どこにいる？」呼ばれてシンベグィレがお父さんに駆けよっていきます。けれども、お父さんが知らない女の人の手を握っているのを見たとたん、ぴたっと立ち止まってしまいました。「シンベグィレに、特別な人を会わせたくて連れてきたんだ。アニータというんだよ」お父さんはにっこりほほえみました。

「はじめまして、シンベグィレ。お父さんからたくさんあなたのことを聞いてるのよ」そう言ったものの、アニータは笑いもしなければ、シンベグィレの手を取ろうともしません。お父さんはというと、とても嬉しそうにウキウキしながら、これから３人で暮らしたらどんなに素敵な暮らしになるかを話しています。
「ねぇ、シンベグィレ、アニータをお母さんだと思ってくれたら嬉しいんだけどな」お父さんは言いました。

シンベグィレの暮らしは、すっかり変わってしまいました。お父さんと朝一緒に同じ椅子に座る時間はありません。アニータが、シンベグィレに家のお手伝いをたくさん言いつけるのです。あんまりたくさんのお手伝いがあるので、夜は疲れて宿題もできません。夜ご飯が終わると、シンベグィレはまっすぐに布団へ行くようになりました。死んでしまったお母さんがくれたきれいな色の毛布だけが、シンベグィレをなぐさめてくれたのです。お父さんは、そんなシンベグィレの気持ちに気づいていないようでした。

何か月かたって、お父さんはしばらく家を空けると言いました。「出張にいかなくちゃいけないけど、ふたりは一緒にがんばれるよね」シンベグィレの顔が曇ったことに、お父さんは気づきませんでした。アニータはだまっていました。アニータも嬉しくなかったのです。

お父さんが出かけたあと、シンベグィレの毎日は前よりもっとつらくなりました。お手伝いを全部しなかったり、弱音をはいたりすると、アニータはシンベグィレをたたくのです。しかも、夜ご飯はアニータがほとんど食べてしまって、シンベグィレにはほんの少しの食べ残ししか回ってきません。毎晩シンベグィレは、お母さんの毛布を抱きしめて、泣きながら寝るのでした。

そんなある朝、シンベグィレは寝坊してしまいました。「なんて怠け者なの！」アニータは怒って、シンベグィレを布団から引きずり出しました。大切なお母さんの毛布にアニータの爪が引っかかって、毛布は真っ二つにちぎれてしまいました。

シンベグィレはもうびっくりして悲しくて、とうとう逃げ出すことにしたのです。ちぎれた毛布と少しの食べ物をもって家を出ると、お父さんが通った道をたどっていきました。

夜になって、シンベグィレは川のほとりの高い木にのぼって、枝の間に寝床をつくりました。そして、寝るときにこんな歌をうたいました。おかあさーんおかあさーんおかあさんがおいてった私をおいて行っちゃったおとうさんは好きじゃないもう、私のことが好きじゃないおかあさんは、いつ帰る？ おかあさんがおいてった。

翌朝も、シンベグィレはまた同じ歌をうたいました。その歌は、川へ洗濯に来た女の人たちの耳にも入りましたが、高い木の上から聞こえてくるので、女の人たちは、これはきっと葉っぱが音を立てているのだろうと思って洗濯を続けていました。けれども、その歌をしっかり聴いた人がひとりだけいました。

その人は木を見上げて、女の子ときれいな色の毛布を見つけると、思わず声を上げました。「シンベグィレ！弟の子だわ！」ほかの女の人たちは洗濯をやめて、シンベグィレを木から下ろしてくれました。シンベグィレのおばさんは、小さなシンベグィレを抱きしめて、一生懸命になぐさめてくれました。

おばさんはシンベグィレを家に連れて帰ると、あたたかいご飯を出してくれたあと、お母さんの毛布をかけた布団にシンベグィレを寝かせてくれました。その夜寝るとき、シンベグィレは泣いてしまったのですが、でもそれはつらくて泣いたのではありません。安心したから泣いてしまったのでした。おばさんならちゃんと面倒をみてくれると、シンベグィレにはわかったのです。

シンベグィレのお父さんが家に帰ると、シンベグィレがいないことに気づきました。「アニータ、何があったんだ? 」お父さんは暗い気持ちで聞きました。アニータはシンベグィレが逃げ出した時のことを話しました。「シンベグィレにみとめてもらいたかったの。でもきっと、私がきつくあたりすぎたんだわ･･･」お父さんは家を出ると、川のほうへ歩いてから、お姉さんの住む村に向かいました。シンベグィレを見かけていないか、お姉さんに確かめるためでした。

シンベグィレがいとこたちと遊んでいるときでした。遠くにお父さんの姿を見つけたシンベグィレは、お父さんが怒っているんじゃないかと怖くなって、おばさんの家の中に急いで隠れてしまいました。けれども、近くまでやってきたお父さんはこう言いました。「シンベグィレ、お母さんにぴったりな人を自分で探し出したんだね。シンベグィレのことが大好きで、しかもわかってくれる人だもんね。僕はそんなすごい娘がいてくれて幸せだし、父さんだってシンベグィレのことが大好きなんだよ」お父さんとはなして、シンベグィレは好きなだけおばさんの家にいられることになりました。

お父さんは毎日シンベグィレに会いに来ました。ある日、アニータが一緒にやってきて、シンベグィレの手を握ろうと手を差し出しました。「本当に、本当にごめんなさい。私が悪かったの」こう言って、アニータは泣いていました。「もう一度、一緒に暮らすためにがんばってみてもいい？」シンベグィレは心配そうなお父さんの顔を見上げてから、ゆっくりと一歩踏み出すと、アニータに抱きついたのでした。

次の週、アニータはシンベグィレといとことおばさんを家に呼んで、ご飯をふるまいました。すごいごちそうです！ アニータはシンベグィレの大好きなものをぜんぶ作っていて、みんなでおなかいっぱいになるまで食べました。食べ終わると、大人たちが話しているあいだ、子どもたちは一緒に遊びました。遊びながら、シンベグィレは本当にとても嬉しくなって、勇気もわいてきました。だからこう決めたのです。「あと少し、あとほんの少ししたら、うちに帰って、お父さんと新しいお母さんと一緒に暮らそう」。

Sagor för barn på svenska

berattelser.se

シンベグィレ

Skriven av: Rukia Nantale
Illustrerad av: Benjamin Mitchley
Översatt av: Ryoko Sakakibara

Denna saga kommer från African Storybook (africanstorybook.org) och vidarebefordras av Sagor för barn på svenska (https://berattelser.se/), som erbjuder sagor på många språk som talas i Sverige.

Detta verk är licensierat under en Creative Commons
Erkännande 3.0 Internasjonal Lisens.